

平城宮北方遺跡の調査

—第480次

1 はじめに

個人住宅の建設にともなう発掘調査である。南北4m、東西は北で2.2m、南で3mの台形の調査区を設定し、面積は10.4㎡である。当調査区の約12m北西では、橿原考古学研究所松林苑第50次調査がおこなわれ、葺石を検出している（『奈良県遺跡調査概報（第一分冊）』1995）。また、道をはさんだ南西側で第447次、南東で第88-7次調査・第445次調査がおこなわれている。調査期間は2011年2月15日から3月2日までである。

2 基本層序

基本層序は、上から現代盛土（約80cm）、にぶい黄褐色土（約40cm、中世遺物含）、堅い明黄褐色土（上層。北は約10cm、南は約40cm。埴輪片含）の順となる。その下は、調査区北半は古墳の葺石や裏込石（10～20cm）があらわれる。南半はその下に灰黄褐色粘質土（3～4cm、古墳の周壕、埴輪多く含む）が続く。それらの下は淡橙色砂の地山および、橙色土と灰白色土の地山。にぶい黄褐色土は西から東へ傾斜しており、東側にはその下に、瓦などを含む褐色土層がある。

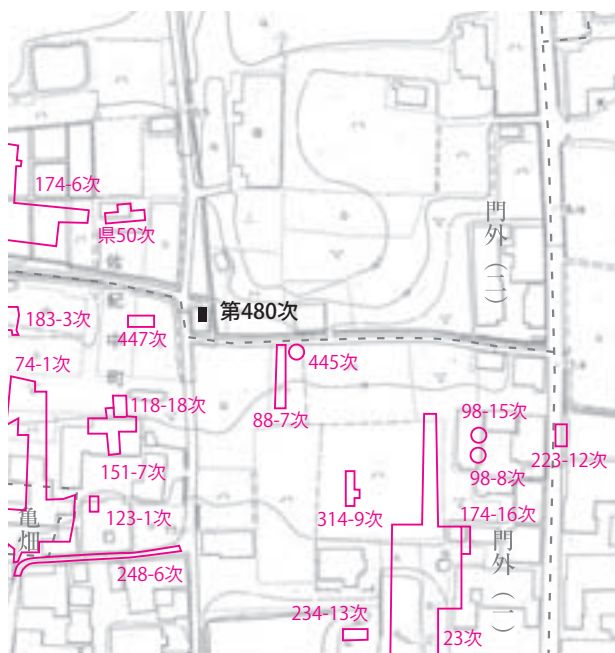


図219 第480次調査区位置図 1:2000



図220 SX316検出状況（南から）

3 検出遺構

SK315 直径40cm、深さ約5cmの小穴。平安時代以前の瓦片出土。明黄褐色土上面で検出。

SX316 古墳の墳丘。葺石を検出したが、原位置を保ったものは少ない。断割調査の所見は、下から地山、古墳の積土である赤褐色粘質土（北が厚く20cm）、直径5cm前後の玉石（厚さ10～20cm。中に炭化物が入っている）、北端のみ堅くしまった明黄褐色土、直径15～20cmの礫（厚さ10～15cm）の順であった。下層の玉石が本来の葺石、ないしはその裏込めで、上層の礫は転落石である可能性もある。調査区北端の下層礫中において、直径20cm前後の礫がほぼ同じ高さで3つ並んだ状態で検出されたことから、それより北が墳丘平坦面となる可能性もある。墳丘の残存高は最大で約50cmである。

SD317 古墳の周溝。深さ10～15cm、幅は約140cm程度。埋土より埴輪が出土。（浅野啓介／文化庁）

4 出土遺物

土器 第480次調査ではコンテナ2箱分の土器が出土した。内訳は、土師器、埴輪、瓦質土器、陶器などであるが、その大半を埴輪が占め、埴輪のほぼ全てが円筒埴輪と考えられる。今回、3点の円筒埴輪を図化した（図222）。1は、上部を残す個体。内外面とも剥離が顕著で調整が不明瞭だが、斜め方向にハケ調整し、外面はその後ヨコ

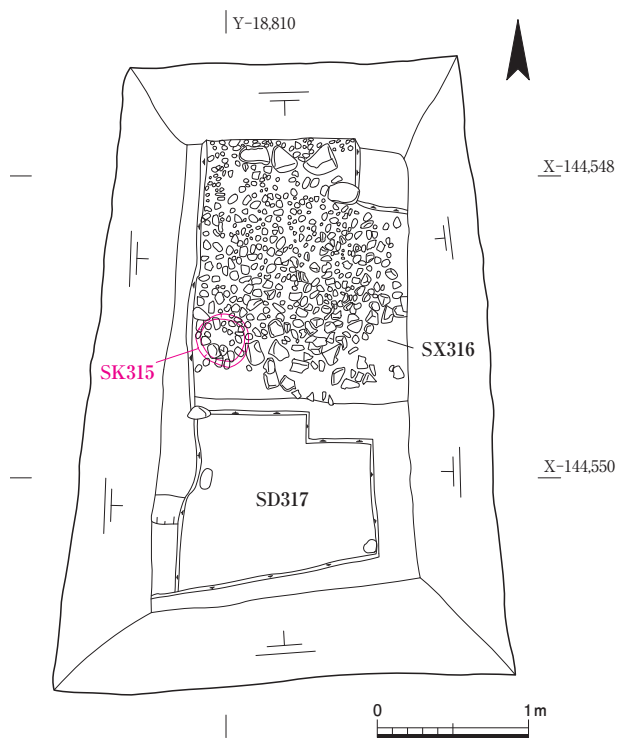


図221 第480次調査遺構平面図 1:50

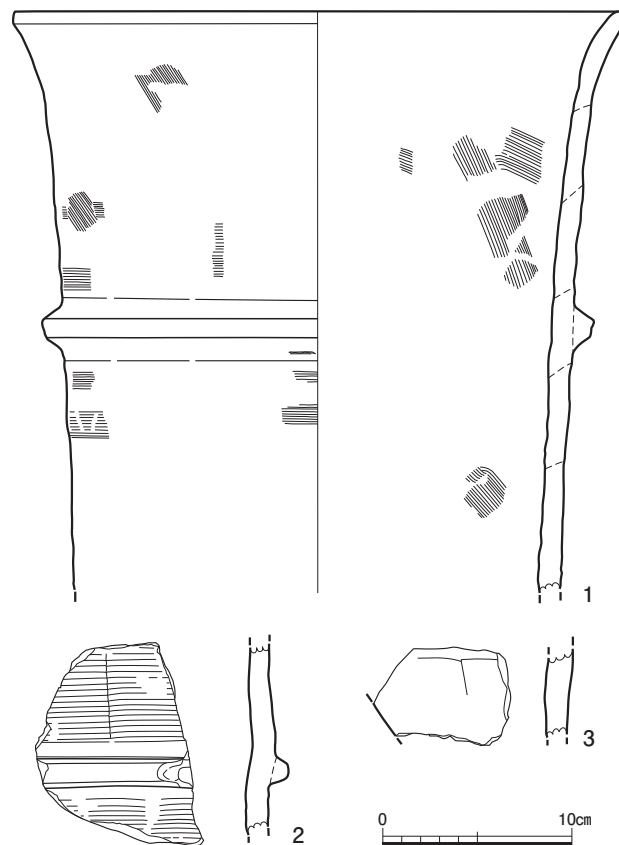


図222 第480次出土土器 1:4

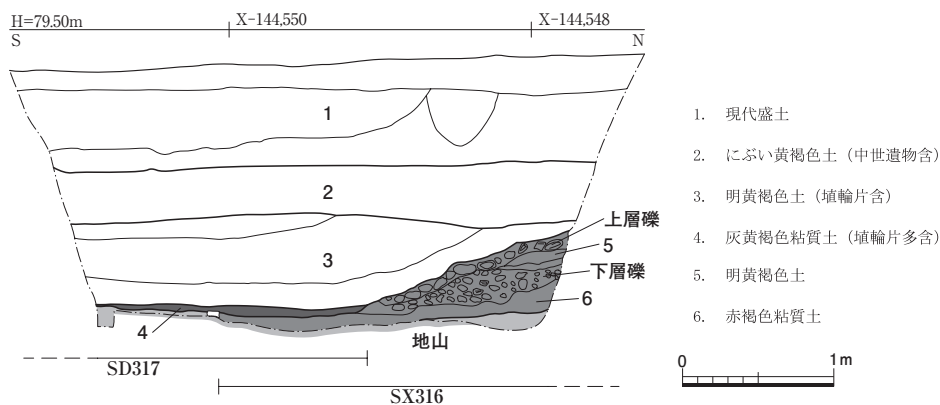


図223 第480次調査西壁断面図 1:50

ハケ調整をおこなうとみられる。透孔は残っていないが、残存部分の最下端に突帯のナデツケ痕跡をわずかに残しており、突帯間距離が13.5cm程度に復元可能である。口縁部から直下の突帯までの距離は16.8cm。3は、三角形の透孔の一部を残す破片。内外面とも磨滅が激しく調整は不明瞭だが、外面はB種ヨコハケによる調整か。2は、突帯位置にL字状の工具を水平に回転させて凹線を横走させ突帯を貼り付ける、いわゆる凹線による突帯間割り付けがうかがえる破片。突帯上部にL字状工具の圧痕を明瞭に残す。内面はヨコハケによる調整を施す。

以上の特徴などを勘案すると、第480次調査出土の埴輪は、川西編年Ⅲ期の所産と位置づけられる(川西宏幸「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』64-2、1978)。佐紀古墳群にお

けるⅢ期は、コナベ古墳、市庭古墳が築造される時期に該当するが、近年の研究ではコナベ古墳が古相、市庭古墳が新相と細分されている(廣瀬寛「佐紀古墳群の形成と埴輪様式」『考古学ジャーナル』624、2012)。今回出土の円筒埴輪は、比較的大型の個体で占められており、新相まで下ることはないと判断できる。(青木 敬)

5 おわりに

本調査では埋没していた古墳を検出した。墳丘は中世までに削平されており、周溝は平安時代までに埋められている。古墳の性格は不明だが、今後の近隣の調査成果に期待したい。(浅野)